２０１６年（平成２８年）８月７日　日曜日
東奥日報新聞　１８面　掲載

夏の甲子園高校野球 きょう開幕

光星 頂点へ照準

9日、市尼崎（兵庫）と初戦

第98回全国高校野球選手権は7日、兵庫県西宮市の阪神甲子園球場でいよいよ開幕する。全国の代表49校が頂点を目指し、熱戦を繰り広げる。2年ぶり8回目の夏の甲子園出場となる本県代表の八戸学院光星高校は、大会第3日の9日、第1試合で兵庫県代表の市尼崎と対戦する予定。伝統の強力打線に、新たな攻撃スタイルを身に付け、東北初の全国制覇に再び挑む。

「全員野球」を掲げる今年の八学光星に坂本勇人（巨人）や田村龍弘（ロッテ）のようなスター選手はいない。今年のセンバツは初戦快勝するも2回戦で決定力を欠き惜敗。今春の県大会初戦は15残塁の拙攻で早々に散った。

「センバツ出場で満足してたわけではないが、ガツガツ、ギラギラしたものが欠けていた」と仲井宗基監督。

だが、その敗戦でナインの闘志に火が付いた。ノーシードで臨んだ今夏の県大会。全6試合で6点以上をもぎ取り、例年を上回る堅守と強力打線が復活した。主導権を終始渡さず奪う、強力打線が復活した。

さらに盗塁数23が示す通り、足技や犠打を絡めた機動力も要所で発揮された。

完投能力のある櫻井一樹、和田悠弥の二枚看板と捕手奥村幸太のバッテリーを中心に、野手陣の失策数は、ここ8大会のうち6大会で上位進出を阻まれている。仲井監督は「苦手意識はない。負けているからこそ倒したい」と語気を強める。

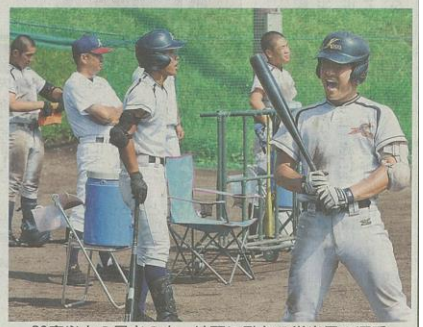
今大会も、関西勢を始め強豪校、伝統校が顔をそろえた。八学光星が、夏の大舞台で東北地方悲願の初優勝に挑むチャンスが再び巡ってきた。

試合運びに同監督も「多彩な攻撃のバリエーションにしつこいプレー。ずっとこういう野球がしたかった」と森友哉（西武）らの大阪桐蔭（大阪）相手に善戦した実は八学光星が春夏を通して敗戦を喫した対戦相手の4分の3が西日本勢。中でも関西勢に対し、夏は、藤浪晋太郎（阪神）、森友哉（西武）らの大阪桐蔭（大阪）相手に善戦した。

投手力、打力はさほど変わらず、各校に全国制覇の好機ありと見る同監督。「わずかの差は埋まったり逆転したり。あとは大会中にいかに勢いを付け、成長できるか。実力以上を発揮できるよう選手をうまく乗せたい」と力を込める。

練習を再開した。「おまえらは完成形ではない。まだ伸びる可能性を秘めている」。指揮官の檄を真っ向から受け止める152人の部員。右翼フェンスに掲げられた「めざせ全国制覇」の看板が夏の強い日差しを受け、激しくきらめいた。

同監督が常々説く「野球で味わった悔しさは野球でしか晴らせない」は、部員一人一人に伝わっている。「センバツでは守りに入り、攻めきれなかった」と語る奥村主将は「いまは各自が目標を持ち、レベルアップを図っている。チームの特長の『明るさ』と、力を出し切れば、夏は自然に届く」と頂点を見据える。


30度以上の暑さの中、練習に励む八学光星の選手たち＝7月29日、八戸市美保野の同校グラウンド

2年ぶり8回目の夏の甲子園出場を決め、喜びを爆発させる八学光星ナイン＝7月21日、青森市営球場

甲子園出場メンバー

背番号	位置	氏名	学年
1	投	櫻井 一樹	3
②	捕	奥村 幸太	3
3	一	益田 敦成	3
4	二	伊藤 優平	3
5	三	徳田 大沙	3
6	遊	小林 直輝	3
7	左	小日出大里	3
8	中	花岡小次郎	3
9	右	田城 飛翔	3
10	投	和田 悠弥	3
11	投	安藤 譲二	3
12	捕	真田 駿	3
13	内	太田 聖大	3
14	内	吉村 健汰	3
15	内	目黒 海都	3
16	投	戸田 将史	3
17	外	小淵智輝弘	2
18	外	辻 優大	3
	部長	小坂 貴志	
	監督	仲井 宗基	

※背番号の○は主将

八学光星の甲子園最終戦績

1997年春	1回戦	3-5	岡山南（岡山）
同 夏	1回戦	9-10	佐賀商（佐賀）
98年春	2回戦	2-3	豊田西（愛知）
2000年夏	準決勝	5-7	智弁和歌山（和歌山）
01年夏	準々決勝	6-8	近江（滋賀）
03年夏	準々決勝	1-2	東北（宮城）
06年春	1回戦	4-6	関西（岡山）
09年春	1回戦	1-2	今治西（愛媛）
11年春	2回戦	2-3	智弁和歌山
同 夏	決 勝	0-11	日大三（西東京）
12年春	決 勝	3-7	大阪桐蔭（大阪）
同 夏	決 勝	0-3	大阪桐蔭
14年春	2回戦	2-8	龍谷大平安（京都）
同 夏	準々決勝	2-7	敦賀気比（福井）
15年春	2回戦	1-4	大阪桐蔭
16年春	2回戦	0-2	龍谷大平安

11年夏以降 3季連続準V

東北初の優勝旗 目指せ

夏の甲子園は2年ぶり8回目の出場となる八学光星。春夏通算では16回出場し、全国制覇にあと一歩まで迫るなど、いまでは強豪校として全国に知られる。創部40年目の1997年春、初めて甲子園の土を踏み、以降3季連続出場を果たした。念願の初勝利は2000年夏。初戦で丹原（愛媛）を破り、以降3季連続で16回出場。

01年夏、03年夏にも8強進出。強豪・光星の名をさらに確実にしたのは、11年夏、12年春、同年夏の3季連続の準優勝だ。11年夏は日大三（東京）に0―11で屈したが、県勢としては三沢高以来42年ぶりの決勝進出を果たした。田村龍弘、北條史也（阪神）らを擁する強力打線で臨んだ12年春は、快進撃を続けた。準決勝で敗れはしたが、同年優勝の智弁和歌山（和歌山）を相手に終盤まで接戦を演じた。

企画・制作　東奥日報社広告局

感謝を抱き 夢に挑戦

八戸学院光星高等学校
校長　橋場 保人

第98回全国高等学校野球選手権大会青森県大会におきまして、本校硬式野球部が厳しい戦いを勝ち抜き、見事優勝の栄誉に恵まれました。青森県代表として2年ぶり8回目の夏の甲子園、春夏合わせますと17回目の甲子園出場となります。

この教育活動を支えてくださっているのが学校関係者を始め外郭団体、そして地域の皆さまの厳しいご支援であると深く感謝しております。

「東北初の優勝旗を青森県に」という夢に向かっての挑戦がまた始まります。まさに甲子園出場は学校を挙げて、地域を代表しての出場となります。選手はもちろんのこと、応援に行く八戸学院光星高校すべての生徒にとって、甲子園出場は人生の大きな財産となる、貴重な教育活動の場であります。

八戸学院光星高校の全生徒が甲子園の大舞台で、期待という重圧を背負いながらも日ごろの感謝の心を存分に表してくれることを心から願っております。

生徒の活躍を通し、多くの方々に感動と感謝をお届けしたいと思っております。

スタンドで、校内で 私たちも応援
生徒からメッセージ

川口 詩音君（3年、生徒会副会長）　昨夏の県大会と今春の県大会での悔しさをバネに練習を重ね、強打復活で見事に念願を達成しました。甲子園では「光星魂」と私たちの思いを胸に、快挙を達成されることを願っています。

中居 楓さん（2年、ビジネス科）　県大会決勝戦で圧巻のプレーを見せてくれた八学光星ナイン！甲子園でも観客を魅了するプレーを期待します。部活動（弓道部）の練習などで現地に行けませんが、学校から全力で応援します。

佐々木 裕美さん（2年、保育福祉科）　2年ぶりの夏の甲子園出場おめでとうございます。2年生の現地応援は2戦目以降ですが、まず初戦をしっかり勝ち抜いて。初の全国優勝を目指し、悔いのないよう全力で頑張ってください。

東奥日報社提供
この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです